



# きたがる

2018年  
北軽発、元気いっぱい号

Since 2010  
VOL.9

表紙の人・セーブオン北軽井沢店スタッフ

## 北軽の「燈台」としての 24年間に、ありがとう！

「セーブオンがなくなる!?」

昨年、北軽井沢に衝撃が走りました。

なくなると言っても店舗はそのままだけ。ローソンに替わるだけ。別にどうってことないのでは?と思われられるかもしれませんが。でも北軽に住む人・通う人にとって、24年前に登場したセーブオンは単なるコンビニ以上の存在。大型スーパーまで車で30分近くかかってしまうこの「陸の孤島」で、早朝でも夜遅くでも、大雪が降っても浅間山が噴火がしても(ー)ここに行けば買いたい物ができるといふ安心感は、街場の人の想像を上回るもの。物質的な面だけではありません。長く勤めるスタッフが多く、常にアットホームなこの店では、常連客のプライベートは丸裸。「仕事やめたんだって?」「おじいちゃん最近具合どう?」個人情報保護なんて都会的な言葉はどこ吹く風。それなのに、そんな近さが煩わしくなくむしろ楽しみに通ってしまうのは、スタッフの人徳であり、「店徳」とも呼べるこの店らしさです。看板が変わっても、スタッフの入れ替わりはないそうなのでひと安心。これからもこの笑顔が燈台のように、北軽を明るく照らし続けます。

||| SAVE ON |||



平成6年、北軽井沢初のコンビニとしてオープン。観光客が訪れる夏場のピークには一日2000人の客数を数えたことも。数年前に店舗を改築し、面積を拡大。今年8月いっぱい閉店し、改装後ローソンとして新規オープン。最も長く勤めたスタッフは22年!店名が変わることについてスタッフは「地元群馬のチェーンでなくなることは少し寂しいけれど、やることは同じ。これまで通り立ち寄ってください!」



# 土にまみれて歌うんだ！

応桑のアテロ地区で、お祖父さんの代からの畑を引き継ぐ若き農園主・山崎聡さん。彼の畑では、他の農家さんには作れない、ある特殊な「作物」が生まれ、世の中へと「出荷」されていきます。ほら、このページからも聴こえてきませんか？ 種れたばかりの新鮮で力強い「歌声」が――。

高校時代からの同級生と、ギター&ボーカルのデュオ「山人（やまんちゅ）」を組み、農閑期には地元や群馬県内でライブ活動を行う山崎さん。「歌は、日々の農作業の中から生まれます。だから僕にとっては歌も畑で穫れる作物のひとつ。ボーカルは習ったわけではないけど、トラクターのなかで絶唱しているうちに鍛えられたかな（笑）」

春先、本格的な農作業シーズンが始まると、夜中も畑に出るなど寝る暇もない毎日。それでも、畑に来る実習生との交流や、猟友会やPTAなど地域活動にも積極的に参加。イラストやデザインで商品企画やPRにも携わるなど、マルチに才能を発揮するアイデアマン。常に面白いこと、周りの人が喜ぶことに全力投球するエネルギーは、やはり太陽と大地から自家発電しているから！

「野菜づくりに関してはまだまだ満足できていません。虫がつきやすくて甘くて柔らかい品種に挑戦し、堆肥や緑肥を使って大きく元気の野菜を作る。市場の枠からは外れるし、周りからはバカやつると思われかもしれないけど、自分なりのこだわりをこの畑の上で表現していきます！」

北軽井沢は、住む場所としては最高でも、通年で働ける仕事先がない、絶対人口が少ないから商売も難しい……。そんな声をよく耳にします。でも、本当に仕事は「ない」のでしょうか。「ない」のであれば自分で作る。「ない」ところこそ、自分を生かすチャンスがある。「北軽が好き」という想いを原動力に、この土地で自分らしく働き、思いっきり笑おう！ そんな逞しい4人の若者をご紹介します。



山崎聡さん（シンガーソングライター）

# マスクの下はイケメンでした。

初めて「へき地診療所」の看板を見たときは、そのストレートなネーミングに驚いたのですが、そんな我が「へき地」を救うため、颯爽と現れたのが、3年前から所長を務める金子稔先生。（ちなみに所長といっても常勤の先生は一人だけ）昭和48年、町により開設されたこの診療所。これまではおよそ3年交替で外部から医師が来ていましたが、金子先生は当初の3年が終了する段階で、なんと契約を10年に延長されたのだとか。こんな「へき地」で？ いいんですか！

「北軽がすっかり気に入ってしまいました。それここで自分がやるべきこと、自分に求められていることが、どんどん増えてきているので。」

新たに始めた高齢者のお宅への訪問診療ほか、夜間の緊急時、そして在宅の看取りまで、診療所外へもフットワーク軽く出向くかと思えば、住民からの要望を受け、月2回の土曜日診療をスタート。休診日には大きな病院に助っ人に行き、最新の医療技術の勉強も怠りません。さらには、地元の野球チームにも所属し、野球大会にソフトボール、マラソン大会、冬は雪合戦に湯かけ祭りに参戦……、24時間365日、八面六臂の働きぶり！

「地域のかかりつけ医として、まずは僕のことをよく知ってもらおうと思っただけですが、やり始めたらどれも面白くなってきて。地域医療はこの10年で大きく変わる。人生のうちでも、きつと今ががんばる時なんだろうと思います。」



金子稔さん（医師 長野原町へき地診療所長）



待つだけじゃなく、攻めなきゃね。

「ふだんはTシャツだから、かっこつけすぎたかなあー」照れながらも、コックコートとサロン姿でピンツとキメてくれたのは、北軽井沢で唯一の……いえ、長野原町内でもたった1軒の洋菓子店「カフェ・ド・フルミエール」オーナーでパティシエの市田裕司さん。パリ、ビエールエルメでのパティシエ修業ののち、自身の店舗旗揚げに選んだのがここ北軽井沢。「菓子にとって乳製品は命。酪農家さんの顔の見える距離でやってみてみたんです」。ところが実際には今、地元酪農家の牛乳や乳製品を現地で仕入れることはとても困難。「残念だし、もったいないですよ。そうした地域の事情も少しずつ変えていけたら……」。そんななかでも、長野原町のふるさと納税謝礼品として開発したチーズケーキには、大屋原のバイオトラスト軽井沢牧場のカマンベールチーズを使用。乳製品の他にも、季節のフルーツは近郊の群馬・長野の産地に直接仕入れに行き、土地の恵みを最大限利用。去年には軽井沢に姉妹店をオープン。パンの出張販売や、町の依頼で料理教室を開くなど、店舗以外にも活躍の場を広げています。

「待つばかりでなく、自分たちから攻めていく！北軽でも通年で営業できるというモデルになりたいんです。僕にとって菓子づくりはなりわいだから必死にがんばって当たり前。今はそれに加えて、自分自身の経験や持っているものを生かして地域に貢献できるのが楽しいですね」。



市田裕司さん（パティシエ カフェ・ド・フルミエール）

村に踊り子が帰ってきた!?



武井琴さん（ダンサー・コマ撮りアニメーション作家）

初夏の浅間牧場。新緑から深緑へと移ろう森のなか。ひとりの小柄な女性がステツブを踏み、ダンスを踊っています。その様子を偶然見た人は、森の小人コロポックルが現れたか、はたまた場所柄、映画「カルメン放郷に帰る」の踊り子カルメンの再来かと思われたかもしれません。コンテンツポラリーダンサーとして、東京を中心に活動を続ける武井琴さん。祖母の建てた山荘があり、小さい頃から訪れていた北軽井沢ですが、長期滞在した2年前、夏以外の風景を初めて目にします。「雪の下から次々と新しい芽が出て、瞬く間に草木が育っていく。そんな姿を観察していると、森が生きていることを意識せずにはいられなくなつて。そこから、自分がそれまでやってきたダンスと、興味を持っていたアニメーションを組み合わせた映像作品を撮り始めました」。風景をバックに踊る様子を連続撮影し、それを自ら繋げて編集する「コマ撮り」映像。北軽を舞台にした作品は、昨年、銀座のソニーギャラリーで展示され注目を集めました。さらに今年度からは、地元住民と一緒に、長野原町のPR動画の製作も手がけることに。「幸運なことに映像製作を通して町の方と繋がることができました。豊かな自然の景色と合わせて、今後はこの町で働く人や、暮らしの様子も一緒に撮りたい。ここで生まれた作品が誰かの目に触れて、北軽を訪れるきっかけになればいいと思います」。





### オオアカゲラ・アカゲラ・アオゲラ・コゲラ

北軽井沢では4種類のキツツキを通年で見ることができます。中でもオオアカゲラが一番大きく、木にとまってドラミングする姿は存在感抜群！キツツキの古い巣穴は野鳥やムササビなどの動物も利用します。(猪井 マービン二郎/キャンプ場勤務)

北軽に住み始めて間もない頃は、「キツツキだぁ」とほのぼの。ところがその夏、キツツキの開けた壁の穴にスズメバチが巣を作っているのを見つけ、これは森での生存の危機だと理解。以来、突かれた時には「つつくなー！」と壁を叩き返して応戦しています！(田淵三菜/編集部)

オオアカゲラ

### クマゲラ

黒くてでかい鳥がログハウスの丸太をつついてる。よく見るとおでこが赤い。クマゲラだ！クマゲラは日本最大のキツツキで、北海道から東北日本海側の巨木があるところに生息。私が住んでいたログハウスの周辺には、浅間山の火砕流をまぬがれた栗の巨木がいくつか生えています。浅間山麓でクマゲラを見たという記録はありませんが、北軽にクマゲラはいます。(古川広樹/鹿沢インフォメーションセンター勤務)



クマゲラ

### カッコウ

声はいいけど、見た目も生態も可愛くないカッコウ。しかし北軽で、春、これほど心待ちにされる声はない。託卵なんてズルい！と思っていたが、自分の生んだ卵じゃないと見破る鳥種も出てきたらしい。ところがカッコウは、その鳥の卵に似た卵を産むという進化を遂げつつあるらしく、レベルが違うと思った。(山崎悠貴)



カッコウ



キビタキ

### キビタキ

数年前、自宅の隣の林に渡って来たキビタキのさえずりの見事なこと。「ヒリリ、チョン、ツリリリ/ビリビリボ、ビリビリボ」特に後半のリフレインが美しく、本人(本鳥)も自覚しているようで自信満々。時には「ツクツクオン」とセミの鳴き真似までしてみせる芸達者ぶり！(藤野麻子/編集部)

高い美しい声で鳴き、声のバリエーションはかなり多い。春にやってくる渡り鳥で、春先はオス同士で「プププ…」と羽音を立てながら激しい縄張り争いをします。(武田つぐみ/キャンプ場勤務)



サンコウチョウ

### サンコウチョウ

「ツキヒホシ(月日星)ホイホイホイホイ」と鳴くから三光鳥という説も。長い尻尾に特徴あり。数年前までは北軽の信号付近で信号待ちしているときに見かけました。(堀江博幸)

一度見たら忘れない姿、一度聴いたら忘れない鳴き声。準絶滅危惧種。個人的に一度はその姿を見たいトリNo.3！(武田つぐみ)



キセキレイ

### キセキレイ

歩き方がなんとも言えず、可愛い！ちょこちょこ ちょこちょこ(すっこい早足)歩いて、尾羽根を上下にフリフリフリ♪北軽だと春先から秋口にかけて水辺の近くにいます。(山本久美子/キャンプ場勤務)

### オオタカ

鷹撃山に近いうちの厩舎の上空をよく飛んでいます。ピー、ピーという鳴き声特徴的。遠目だとトンビやカラスと見間違いがちですが、見慣れると大きさもひと回り小さいし、尾羽も丸みがあってカッコいい。飛び方もトンビに比べると忙しく、2~3回羽ばたいて数秒間風によってを繰り返します。(松田翔平/厩舎経営)



オオタカ

### アカハラ

アカハラは名の通り腹が赤い。朝早すぎず、夕方遅すぎずな良い時間に鳴くので、ちょうど仕事の始業終業の目安に。川の近くなどの空気に湿り気ある中で聞くのがおススメ！(山崎悠貴/編集部)



アカハラ

浅間山麓では4月頃に南の方から渡って来る渡り鳥。「キョロン、キョロン、ツリリリッ」と透き通った高い声は、高原の初夏の雰囲気を一層際立たせてくれます。(堀江博幸/ネイチャーガイド)



## 浅間高原



# 私的・野鳥観察図鑑！〈夏鳥編〉



ホシガラス

### ホシガラス

松ぼっくり大好き。高山帯に生息するため登山中に出会うことが多い。ごくまれにキャンプ場や浅間園でも見かけます。(武田つぐみ)

登山好きの友人から名前は聞きながら、なかなか姿を見ることなかった憧れの鳥。2年前の夏、四阿山に登ったとき、ハイマツの木のそばで何やら動く影。目をこらすとブルーグレーの羽毛に白い斑模様。松ぼっくりを探すことに夢中で、最終的にはすぐそばまでやってきた。辛い登り道の最後のご褒美のような遭遇でした。(藤野麻子)

### ヒヨドリ

いつもペアで行動し知恵と権力で渡り歩く夫婦。バードフィーダーに来るスズメやシジュウカラはヒヨドリ夫婦が来ると遠慮して近づけないという縦社会。野菜が育たないなあと思っているところのヒヨドリがほうれん草の先やレンギョウの花などを食べてしまっていることも。(A.Y/応桑在住)

給餌台に果物を置くと真っ先に飛んでくる。「ピーヨピーヨ」とにぎやか。果実や花の蜜を食べる。狩猟鳥獣で骨ごとバリバリ食べられます！(武田つぐみ)



ヒヨドリ

### キジ

ある朝、畑に行くとき起こした畝の先に扇状の薄茶色の何か広がっている。トンビが死んでいるのかと近づいてみると、キジのオスが逆立ちしてる。すぐ近くの畑でメスが砂遊びをしていた。きっと見張りをしていたオスが手持無沙汰でヒマだったんだねえ。(中原せつ子/酪農家)

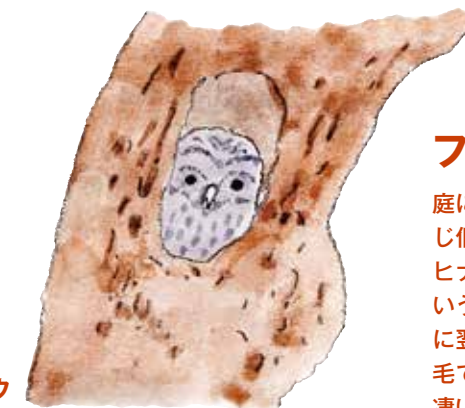
キジは産んだ卵の数をちゃーんと覚えてる。試しにいくつか取ってみると、次の日その数だけ産み足してある。ペアが期間中に産む卵はだいたい12個だけど、孵化して成長するのは半数以下。親はひなを餌のある場所まで連れて行って食べさせるんで、畑や人家の近くに巣を作るね。(土屋博義/鎌原在住)



キジ

### フクロウ

庭にある大きなニレの樹にウロがあり、毎冬つがいのフクロウ(同じ個体かは不明)がやって来て春まで子育てを行います。ある日ヒナが洞から顔を出したと思ったら、夜には親の「ホウホウ」という鳴き声に交じて「チチチ」という可愛い鳴き声。さらに翌日にはもう巣だって行った様子。まだ鼠色のフワフワした羽毛で飛び方もままならないであろう彼らの旅立ち。野生動物って凄いですね。(稲垣豊/ツリーハウスビルダー)



フクロウ

### オオジシギ

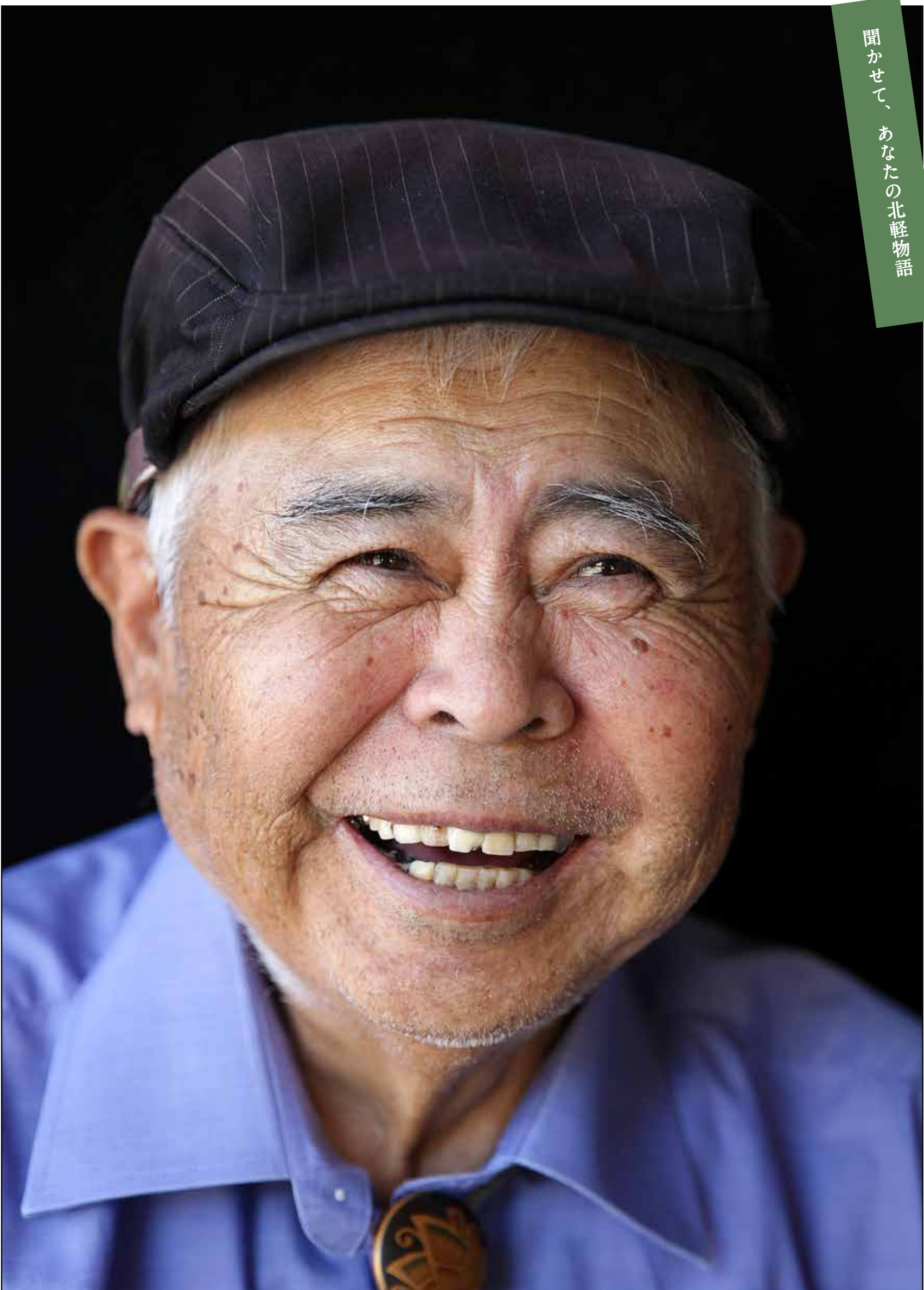
北軽井沢のキャンプ場で働いていた頃、上空からよく「ズビャーク、ズビャーク、ズビャーク、ズババババ！」と急降下するときの声と羽根をばたつかせる音を聞きました。(堀江博幸)

オオジシギはちょっと間の抜けた顔をしている。一度聴いたら忘れられない鳴き声、羽音。自己主張の激しい求愛行動兼縄張り主張をする(あの顔で)。冬はオーストラリアまで行って越冬するそう(あの顔で)。(山崎悠貴)



オオジシギ





# 儲けようっていうだけじゃない。 この土地に合って、 お客さんが喜んでくれるのは なんだろうって。

(宮川繁男さん・82歳)

浅間牧場の入口、いわば浅間高原エリア全体の玄関先とも言える場所に建つ「浅間牧場茶屋」。北軽井沢を訪れた人なら誰もが目にするウエスタン調の建物と「ジョッキ牛乳」の看板。ここで60年間、牧場と北軽の移り変わりを見つめ続けてきたのが、宮川繁男さん、通称シゲちゃんです。

「シゲちゃんは浅間高原きってのアイアーマン」。親しい人びとは口を揃えてそう言います。バンガローやペンションブームが始まる以前、まだ周囲には建物ひとつなかったこの場所に、「これからはここに人が集まるようになる」と店を構えたのが、二十歳を過ぎたばかりの昭和34年。目論見どおり、昭和50年代にかけて店は大繁盛でも、それはただ時代に乗ったというばかりではありません。お客さんと直接顔を合わせ、会話をし、望んでいることがあればすぐかたちにしてみる。生まれもつての愛嬌と開拓精神が、たくさんのアイアアを生み出し、この場所に多くの人を呼び寄せたのです。そんなシゲちゃんの風貌や言葉のひとつひとつには、流した汗と浅間高原の風が染み

.....

子が入って来ると恥ずかしくて隠れるくらいでさ(笑)。その観光客が「ここはいいところだけど食事もできない」って言うから、そうやってんでこの土地を大変な勢いで買ってね。思い切ったもんだけど若かったし、その頃、軽井沢の別荘の人らが乗用車でどんどん来るようになり始めて、こりゃ思い切ってやってもなんとかなるかかって見込みはあった。それが昭和34年。まだまだわりにはなんにもなかったね。この建物は、当時建てたまま。あの頃



親父が栗平にあった林業の会社に仕事に来て、もともと栗平にいたお袋と結婚して。俺は生まれも育ちも北軽。この土地から出たこともねえんだから。19のとき、仕事がなかったからね、牧場なんかで半間の掘った小屋の小さな売店を建てて。そこで牛乳とかサイダーとかそういうものを売ってたの。当時は、観光客の女の

ゴルフブームで俺もゴルフを始めて、ゴルフ場のクラブハウスを見て、これからはこんな形が流行るんじゃないかって、自分で絵を描いて、こういうの作ってくれて親戚の大家に頼んでさ。出窓なんか珍しかったから、「これ、空中に出てるけどどうすんだい」なんて言われてね。そこからは時代もよくて、賑やかなって、どんどん忙しくなって。

焼きトウモロコシ、あるだろ。あれなんて日本でいちばん早く始めたのが俺じゃねえかな！ まず昔は、トウモロコシっていつたら夏が過ぎて9月にならないとできないかった。それをなんとか夏にできる方法はないかって考えて。女房の親父さんがそういう研究をしたから相談したら、できるかもしれないって。今みんなが畑に使うマルチ、あれがちょうど出始めた頃で使ってみたらって言うんで試してみたら、ほんとに7月の15日にできちゃった！ で石窯作ってさ、でかい鍋で茹でて焼いて。早速東京から来た紳士のお客さんに一本くれ、幾らだ？って聞かれて、最初だからまだ値段を決めてなかったんだけど、5円で仕入れてるところ思い切って40円で買って言うたら、家族の分みんな買って旨い旨いって言うんだ。そうしたらそれを聞いたそこからじゅうの店のお客がみんな俺んとこ来て、独り占めだったね。そりゃそうさ、こっちはしばらく前から一生懸命考えてさ、誰も真似できねえんだから！ この店以外にも、山野草集めたり、夏ハゼの実を採ったり、キノコを増やせないかとか、まあいろいろ考えたね。この土地に合って、人に喜んでもらえるものはなんだろうって。ただ儲けようって言うんじゃないんだ。お客さんに喜んでもらって、それでうまく回ればいいってくらいで。この年になって俺はもう先は長くはねえが、だけども、若い町長が町全体を明るくしようって真剣に取り組んで、それを後押しする若手もいて、将来が明るく感じるね。自分が苦しくても、地域が明るくなって

.....



「応桑こども園」に通う北軽5人組。いつも帰りを待っていてくれるのは…？

「あきみなみさーん」という元気な声でバスを降り、まっしぐらに北軽井沢観光協会に駆け込んでくる子供たち。応桑こども園に通う年中さんと年長さんの5人組、はるま君、しゅんたろう君、ゆきなちゃん、ゆうき君、てっしよ君です。2017年に応桑幼稚園は「応桑こども園」に変わり、赤ちゃんから幼児まで51人が揃ったにぎやかな園になりました。その中で北軽井沢のバス停から路線バスを利用するため、行きに帰りに観光協会の前に子供たちが集まります。

そして6年前から観光協会の案内員として働くのが町内出身の秋南澄江さん。「○○くん、おっかえりー」と子供たちにも負けずに元気な秋南さん。お客様一人一人に丁寧に対応し、大人から子供まで大人気。散歩中の犬だつて秋南さんに会うまでは入り口を動きません。「あきのなみさーん」「あきみなみさーん」と最初はうまく言えなかった子供たちも、毎日観光協会に通ううちにちゃんと呼べるようになりました。

夏の暑い日には、秋南さんがカルピスを凍らせた冷たいアイスを作ってくれていることをみんなちゃんと知っています。「親の顔なんか見ないで秋南さんのところに飛んでいくんだから」と呆れ顔のお母さん。何があつたのか泣いてバスから降りてくる時も、観光協会に寄ってお喋りしているうちにこ機嫌に。子供たちにとって秋南さんが迎えてくれるこの場所は、こども園でもおうちでもない、案



北軽井沢—長野原草津口駅線では、時折、応桑こども園の園児たちが描いた絵や作品をバスの中に展示する「ちびっこギャラリーバス」が出現します。この期間はバスの中が明るく元気なエネルギーでいっぱい！

# 北軽あるある



生粋のきたかろっ子に聞けば、ほとんどの人が「方言はない」と答えるだろう。確かに、他の地方の人と話していて、全く通じないような事態はあまり発生しない。でも、気候風土と暮らしに育まれた独特な言い回しには、ちょっとせつちで、威勢がよくて、「義理と人情」みいたなものが浮かび上がってくるように思う。今号の「北軽あるある」では、豊かな北軽弁を取り上げる。

## 「まあーず」(とても、いやー本当に)

「まあーず、参った」「どうしょもねえな、まあーず」「まあーず、美味いんね」など用いる。この単語の後には、大きな話が聞ける可能性が高い。「どうしたん」と話の続きを聞いてみよう。

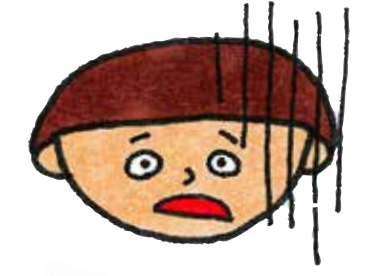


## 「ぶちやる」(捨てる)

「そんなん、ぶちやりな!」「ぶちやり」といって「はあもう、ぶちやるべえ」などと用いる。使いに使って使い倒し、もうどうにならないものを捨てるような雰囲気がある言葉。

## 「きもが ilerる」(腹が立つ)

「庭に百合の球根植えといたら、猪のヤツが掘り起こして全部食っちゃった。まあーず、肝を入れるよ…」のように用いる。また、怒りっぽい人を「きもいらし」とも言う。上記エピソードは私の祖母による実話。ムカついた・腹が立ったより、焦れるような怒りが匂い立つ。



## 「くろう」(つらい、だるい)

「はあ、くろうだ」「くろうだから寝てたい」などと用いる。体調が悪くて億劫なことを全てひっくるめた言葉。いつも威勢のいい北軽っ子の、もう何もしたくない感がこの一語に含まれる。



## 「おいやげねえ」(可哀想)

「(雌鶏が欲しかったのに)間違って雄鶏買って来た人が、朝4時からうるさくて寝れねーって言って、おいやげねえから、俺こないだ、しめて食ってやった」のように用いる。上記エピソードは私の弟による実話。雄の鶏を飼ったことがある人はご存知と思うが、早朝の雄たけびのボリュームは相当で、とても寝てられない。間違って買った人もおいやげねえけど、雄がゆえに食われた鶏もおいやげねえや。



## 「のめし」(怠け者)

「この、のめしモンが!」「のめしこくな! (怠けるな)」「あんなのめしン所に嫁いって、おいやげねえよ…」のように用いる。いつの世も、のめしモンは好かれない。

## 「きたかろ建物応援団」がゆく!

### 〈第六回〉長野原町役場

絵文 伊郷吉信

「自由建築研究所」代表、協同組合「伝統技法研究会」副理事、NPO「あさま北軽スタイル」理事、設計活動とともに、建物保存活用のためのアドバイス、調査、研究を行なう。「あさまの家移築プロジェクト」「狩宿茶屋本陣調査」等、北軽井沢・長野原町とも縁が深い。

夏が手前まで来ている6月の午後、長野原町役場を訪れた。西からの陽を受け止めて建物は両手を広げるように迎えてくれた。

木造2階建て、外壁は下見板張り、屋根は寄せ棟で、懐かしい感じがする。特徴的なのは玄関の上にはバルコニーが張り出していることである。その上には入母屋造りの屋根が建物から飛び出すように出ている。この屋根は2本の柱で支えられていてこの張り出しが豊かな表情を与えている。

木造の役場がどのくらい全国に存在しているか調べてみた。どうも指で数えるくらいしかないようだ。いずれも玄関を張り出した左右対称の形の洋館風である。左右対称の象徴的な形に威厳をあらわし町を束ねる意図があるからだろうか。しかし長野原町役場は上から見下ろすような態度は見当たらないのである。

日本全国の木造の庁舎がおおかた機能上、耐震上の問題で鉄筋コンクリート造の庁舎に建て替わる中、今もここには現役で生き続けているのだ。これはもはや、庁舎というより町という家族の家といった方がいい。ただ残



念ながら、長野原町役場は、現在建設中の新庁舎への移転が決まっているという。

さて間取りは1階は各課の窓口があるが内装は修理している。さすがに手狭になったのか西側と北側には増築を行っている。よく当時の雰囲気を残しているのは1階南側の町長室である。2階にあがると大会議室(議場)がある。ここも後にインテリアを直しているが木のやさしい感触が伝わってくる。

建物は昭和4年に建てられた。須川電力(株)、吾妻川電力(株)、(株)飛鳥組などから寄付があり、個人では北軽井沢に大正時代はじめて別荘を建てた田中銀之助を筆頭に、北軽井沢に大学村を創設した松室至、(株)吾妻牧場を設立し北軽井沢観光に寄与した、亀沢半次郎、井田栄造、水野豊などの名前がある。自分の別邸を応桑諏訪神社の社務所として移築した子爵秋元春朝の名前もあり、長野原町とゆかりが深い寄付者が名前を連ねている。

建物が建った昭和4年は世界恐慌がはじまり、日本の中国大陸への進出が本格化する時代である。その後日本は戦争へと向かう。敗戦後、帰還した人たちが、ここに入植した人たちは感慨を持ちこの建物に向かったことを想像する。多くの人を出迎え、受け入れた歴史を忘れてはならない。今日でも多くの人を受け入れている。建物は記憶を有している。町の喜びも悲しみもこの建物が見てきたのだ。新たな利用を得て再び生きてほしい建物だ。



## 北軽あれこれ

大藤敏行

昨年七月、北軽井沢の大学村へ行った。作家の野上弥生子さんの山荘付近では、ホトトギスが気持ちよさそうに鳴いていた。近くの谷底から、熊川の流れる音が響いてきた。こんな豊かな自然のなかで、野上さんは五、六月から十一月頃まで、たったひとりで北軽暮らしをなさっていたのだ、としみじみ想った。

北軽といえば、わたしの場合、どうしても軽井沢高原文庫の仕事に関する事柄が多くなってしまう。岸田國士展（一九九〇）、野上弥生子展（一九九五）、谷川俊太郎展（二〇〇三）など、北軽ゆかりの文学者の展覧会を、これまで開催させていた。そのたびに北軽へ足を運んだ。

舗装されていない土の道。山荘がぼつぼつと、ゆったり建てられている。浅間山が軽井沢側から見ると、ずっと近くに見える。そして、なにより自然が雄大だ。昔、大学村には、外国語の草分けのような人たちがいて、英・独・仏・露・羅の辞書をつくった、という話を誰からか聞いたことがある。

高原文庫の定期刊行物である「高原文庫」や「軽井沢高原文庫通信」にも、北軽ゆかりの文学者や芸術家の多くの方々に、これまでエッセイを書いていただいていた。岸田今日子、谷川俊太郎、寺島尚彦、野上素一、小山弘志、芥川瑠璃子、野上耀三、中村稔、松永伍一、井本農一、林光、宇佐見英治、飯田善国、飯島耕一、間宮芳生、佐野洋子、佐々木幹郎……といった方々だ。

いま、懐かしく思い出されるおひとり、は、大学村の山小屋で一年の大半を過ごされていた岸田裕子さんだ。童話風の山小屋。大きな暖炉。紅茶に手作りジャム。植木屋の古矢一穂さんが採った自家製蜂蜜。夜遅くまでのランプ遊び。愉しかった。

北軽井沢ミュージックホールで行われる音楽会や、大学村主催の大江健三郎さんらの講演など、裕子さんからよくお誘いを受けた。「あの丸木橋をわたると、だれもいそがない村がある」裕子さんの詩「だれもいそがない村」の書き出しである。わたしのなかで、北軽はいつも身近にあり、心の奥に、大切にしまわれている。

## 大藤敏行（おおとう としゆき）

1963年埼玉県生まれ。筑波大卒。軽井沢高原文庫副館長。「堀辰雄展」「岸田今日子展」「遠藤周作展」はじめ、約百余りの文学展に携わり、軽井沢ゆかりの文学の世界を伝え続ける。著書「軽井沢と文学」「ふるさと文学さんぽ長野」、論文「立原道造と軽井沢」「堀辰雄の純粋造本」など。2019年程前から一般読者の文学散歩も行っている。深沢紅子野の花美術館館長。

## 編集後記

「きたかる」と聞いて、幼い頃イメージした北軽井沢（以下北軽と呼ぶ）のことと、今イメージすることでは、自然豊かな風景はそのままだに、同じ場所とは思えないほどの心で立体的に育っている。

約20年前の子供の頃には家族4人で北軽の山荘に泊まり、毎年の春や夏の1週間ほどを過ごすことになっていた。滞在中は終始家族そろってほんとうによく遊んだ。晴れた日には、森で摘んだ草を食器に盛り付けるおまご、竹内テニスで夕暮れまでテニスをしたり、夜には眠くなるまでランプ。特にお気に入りだったのは、車のルーフから妹と二人で顔を出し、アップダウンの激しい別荘地の道を車でジェットコースターすることだった。虫がいっぱい出て少し嫌なことと夏休みの宿題を除けば、家族の楽しい時間しかない場所だった。その景色には家族と森以外の「一人」の姿は一切なかった。

中学生になって忙しくなると、そんな北軽遊びはできなくなったが、10年弱のブランクを経て再度北軽を訪れた時、迷うことなく、ここに住みたい、と思った。好運にもそれが叶ったことで私は北軽で生活し「生きて」と言いたい、気がつけば6年。なんと、遊びに来ていただけの少女はカメランとしてこの「きたかる」に関わっている。

そして、この春からは海の波の音の聞こえる家で新しい家族と住みはじめた。

また北軽を離れた今、「きたかる」と聞いたとき、私の脳裏に浮かぶ風景は、幼かった頃よりも大きく感じる浅間山と、野性味たっぷりな森。どこよりもビビットで美しい季節の移り変わる風景。そして、その中で暮らすたぐさんの人たちのいきいきとした顔と姿がぼこぼこと思いつく。いきいきしてない人がいない。

その人たちに会わせてくれたのは、カメラとこの「きたかる」だった。北軽の人たちの元気な姿を思うと、ぐぐぐぐぐーっつとチカラが込み上げてくる。

北軽は、永遠の心の故郷です。(M)

## きたかる vol.9

2018年7月発行

企画・編集・制作／きたかる編集部

【編集長】藤野麻子 【編集】山崎悠貴・ウッド美幸 【写真】田淵章三・田淵三葉（森の写真館）【デザイン】田淵章三【WEB制作】G+G・AKIKO

発行／北軽井沢じねんびと

印刷／上毛新聞 TR

※この冊子は長野原町の助成を受けて発行しています。

お問合せ：きたかる編集部

メールアドレス：info@kitakaru.me

住所：〒377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1987-362

北軽井沢駅舎内

「きたかる」へのご意見・ご感想をお寄せください。

「きたかる」ホームページ <http://kitakaru.me>

北軽井沢の季節の風景、イベント、取材こぼれ話など、WEB版も更新しています。

※本誌掲載の写真・文章を無断で複製・複製・転載することを禁じます。